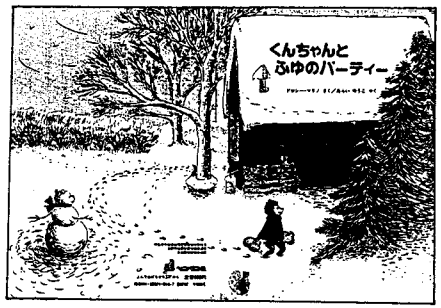
しろね図書館だより

発行 新潟市立白根図書館
No.79 平成18年12月1日

子どもたちといっしょに



「くんちゃんとふゆのパーティー」

ドロシー・マリノ さく　あらいゆうこ やく
（ペンギン社）

子どもの知りたいという欲求はつきませんよね。たくさんのことを子どもに教えていくのは一番身近にいるおとうさんおかあさんだと思います。この本のおとうさんとおかあさんもやさしくくんちゃんがやりたいようにやらせてくれます。そこで、くんちゃんはたくさんのことを学びます。子どもたちもくんちゃんと同じようにして少しずつ成長していくのです。

寒い冬ですが、読む人の心をぽかぽかあたためてくれる絵本です。子どもと一緒にぜひ読んでください。

第74回読書会

12月17日（日）午後2:00～
白根学習館 ルーム2

「残花亭日暦」

田辺聖子 著（角川書店）

しろね図書館友の会
しろね図書館 共催

自然写真家・天野 尚講演会

「創造の原点、アマゾン」

アマゾンやアフリカなどの熱帯雨林を探検し、多くの風景を撮影し続けてきた写真家・天野 尚（あまの・たかし）さんをお招きして、講演会を行います。

天野さんがアマゾンで撮影した写真をスライドで紹介しながら、熱帯雨林の魅力や、ふるさと・にいがたの自然への想いを熱く語る90分です。アマゾンでワニと格闘したり、ピラニアの刺身を食べたりした裏話も飛び出すかも？

◆日時：2007年1月14日（日）
13:30～15:00（開場13:00）
◆会場：白根学習館ラスベックホール
◆定員：500名。申込不要・入場無料。
◆主催：しろね図書館
後援：しろね図書館友の会
◆お問い合わせ：しろね図書館
025－372－5510

12月の行事　ブックバス

1 金			白井小 12:55～13:35 白井中 14:00～15:45
2 土	おはなし会 3:00～		大通地C 14:30～15:00 根岸農公 15:30～16:00
6 水	絵本のじかん 3:00～		
7 木			大通小 13:00～14:30
9 土	おはなしかご例会 10:00～ おはなし会 3:00～		
13 水	第47回 あかちゃんが（はじめてで）あうほん 絵本のじかん 3:00～		
16 土	おはなし会 3:00～		
17 日	第74回読書会 2:00～		
20 水	絵本のじかん 3:00～		
23 土	おはなしかご例会 10:00～ おはなし会 3:00～		
27 水	絵本のじかん 3:00～		
29 金	～	1/4	年末年始の休館日 新年は5日から開館します

✿ 今月の展示架テーマ「12月」

山々は雪の帽子をかぶり、平野も冬支度を始めています。
振り返ってみるとあっという間のようですが、今年もあと1ヶ月で終わります。
しかし、その前に楽しいイベント【クリスマス】が待っています。そして、図書館でもクリスマスおはなし大会が開催されます。楽しい絵本やおはなしがみんなを待っています。

12月9日（土）はクリスマスおはなし大会へ行こう！

- 1回目　午後2:00～2:30 ▶ あかちゃん・小さい子向けの絵本やおはなし
- 2回目　午後2:30～3:00 ▶ あかちゃん・小さい子向けの絵本やおはなし
- 3回目　午後3:00～3:30 ▶ 小学生以上向け（整理券必要）
- 4回目　午後3:30～4:00 ▶ 小学生以上向け（整理券必要）

ところ　しろね図書館 おはなしのへや

＊ 整理券は午後2時から図書館のカウンターで配ります。

＊ 1・2回目はあかちゃん・小さい子優先。

クリスマスに贈りたい本、読みたい本

- 「急行『北極号』」C.V.オールズバーグ（E ヴ）絵と文　村上春樹 訳（河出書房新社 他）
- 「クリスマスの12にち」エミリー・ボーラム（E ボ）絵　わしづなつえ 訳（福音館書店）
- 「クリスマスの女の子」ルーマー・ゴッデン（E ボ）さく　久慈美貴 やく（ペネロペコーポレーション）
- 「クリスマスストーリーズ」大崎善生 他著（角川書店）（児童 933 ゴ）（一般 913.67）

などなど、他にもたくさんあります！

11月の

来館者	16.143	人
貸出冊数	14.665	冊
予約件数	243	件
ブックバス利用者	383	人
ブックバス貸出冊数	1.017	冊

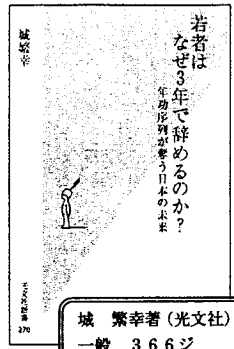
視察・見学 33人含

リクエスト情報（しばらくお待ち下さい）

1位 東京タワー（11名）
2位 ハリーポッターと謎のプリンス 上・下（9名）
3位 名もなき毒（8名）
4位 陰日向に咲く（6名）
5位 赤い指（3名）
他

～図書館員がおすすめするこの一冊～

「若者はなぜ３年で辞めるのか？
年功序列が奪う日本の未来」



城　繁幸著（光文社）
一般　３６６ジ

著者は東大法学部を卒業後、富士通の人事部に所属し、新人事制度――いわゆる「成果主義」――の運営に携わっていた３３歳の元エリート社員。２００４年に出版した「内側から見た富士通『成果主義』の崩壊」においては、富士通での成果主義の失敗を批判した。今回の著書は、副題にもあるように、現在の年功序列制度と若者との関係について記述されている。

本書は、「何だかんだ言っても、日本は年功序列で、今の若者は何かにつけて損をしている」という一言に尽きる。それは年金制度、給与体系、人事体系……そのすべてにおいて当てはまる。

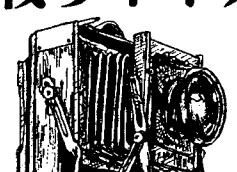
年金に関しては、現状の年金システムを維持していく限り、今の若者が損するのは明らかである。なんせ日本は少子高齢化なのだから。給与体系や人事体系に関しても、若者は損をしている。若者によれば派遣社員やフリーターと呼ばれる職種が拡大したのは、年功序列の給与システムを、維持するためだという。つまり、年功序列を当たり前だと感じている昭和の価値観を持った人々の給与を維持するために使われているのが、安価な労働力である派遣社員やフリーターというわけである。

このような、派遣社員やフリーターを必要とする企業では、新卒就職者が３年で３割辞めるのだ。
題名が問いかける「若者はなぜ３年で辞めるのか？」――その回答もまた、本書にある。
ぜひ、これからの若者に読んでもらいたい本だ。

（星　島　　等）

しろね図書館では、2007年1月14日（日）に文化講演会を開催します。
このコーナーでは、講師の天野さんがどんな人か紹介していきます。

戦うネイチャーフォトグラファー



天野尚

あまの・たかし　１９５４年新潟県新潟市（旧巻町）生まれ。１６年間競輪選手として活躍するかたわら、アフリカ諸国、インド、南西諸島などを訪れ、生態写真やエッセイなどを専門誌に発表。以来、ライフワークとして世界３大熱帯雨林（アマゾン、ボルネオ、西アフリカ）にて、「原初の風景」をテーマに大判カメラで撮影に取り組んできました。富士フィルムネイチャーフォトコンテスト・グランプリ（１９９２年）他、受賞歴多数。

また、熱帯魚飼育と水草の育成方法について研究を続け、「小さな生命を愛せずして、大自然を語ることはできない」という理念のもと、豊富な自然観察の経験と独自の美意識を融合した水草レイアウト手法「ネイチャーアクアリウム」を提唱し、実践してきました。この概念は、ワシントン・ポストをはじめとする海外メディアでも広く取り上げられ、日本の高校生物の教科書にも登場しています。

（次号につづきます！）

第73回読書会

平成18年11月19日（日）　午後2時～

課題図書
「星々の舟」　村山由佳著　（文藝春秋）

第１２９回直木賞受賞作品。
許されるはずのない、血のつながった兄妹の恋。自分の居場所を探す公務員の長男。父の戦争の傷跡など全六章。各章それぞれが独立しているが、母の死を中心に家族がつながり、そこから自分たちの生き方を見つめるストーリー。

☆★☆★☆★　読者感想　☆★☆★☆★

まず、この題名の「星々の舟」ってなんなんだろうと思った。最後の章の重之の言葉からの引用なのか。それとも、各章に一人ずつの主人公が設定されている家族の物語なので、星を人にみたて、舟を家とか集合体に置き換えて家族そのものを表現したかったのか。しかも、船ではなく舟なので、小さな集合体に感じられ、この水島家だけということが強く感じられる。捉え方は千差万別だろうが、こうやって題名の意味を考えるのも面白い。

とにかく、読みやすい作品だった。ただ読んだあとにどうも自分の年齢と合わないようなくらい波瀾万丈な家族の物語で、もっと若い人が読んだら違う感想が聞けたのかと思ったし、わかる部分もたくさんあるのじゃないかと思った。

今時の文章というか、難しい表現がなくてこのまま映画化されてもいいような感じがした。というか、映画を見ているような感じがした。同じ作者の作品で「天使の卵」が映画になっていて、その続編の「天使の梯子」がドラマになっている。もしかしたら、細かく描写したのは映像化されることを期待していたのではないかと深読みしてしまった。

最初の章「雪虫」が一番おもしろかった。この家族、どの人も幸せなハッピーエンドを迎えられていないから、読み終わっても決してすっきりとしなかったし明るい気分にもなれなかった。それぞれがだめになるわけではなかったし、それぞれが一歩前進した感情を抱いていたのだが、だれかひとりでもいいからハッピーエンドで終わってほしかった。

父親の重之はとても身勝手のように思えた。そう思ったからか、他の人物よりも冷ややかな目線で読んでいた。

現実的にありえないような事件がありすぎて真実味がない作品になっていたと思う。登場人物は自分さえ良ければそれで良いような感じになっている。強いて言うならば、最後にこの家族全員が主人公である物語が欲しかったかな。もしくは、家族が幸せに一つの屋根の下で暮らしているような物語が欲しかった。

書いたときの時代を反映させていて、この当時の世相がこういう感じだったのか。それで、作者は反面教師のように、読者にこうなって欲しくないということを思って書いていたのだろうか。

知らないという幸せもあるんだなと思い、本当なら家庭崩壊しそうな話だ。幸せってなんなんだろうかと考えさせられた。

家族の「その後」が作品になるのかちょっと期待している。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

小林　友治

次回の読書会は12月17日（日）

「残花亭日暦」　田辺聖子　（角川書店）

平成十三年六月一日から平成十四年三月十一日までの日記文学。文学というと難しそうだが極めて簡単で、他人の日記を覗き見しているようなドキドキ感もある。なんてことない日常がユーモラスに書かれている。

原稿の執筆、直木賞の選考、講演会、忙しすぎる毎日。そして最愛の夫の死。『今日のメニューは・・・』なんてものもあり、作者に親近感が沸きます。

みなさんのご参加をお待ちしています